



中学校三年(当時小学校三年)
浅枝正忠

僕はその時小学校の三年生で、まだなにもわからぬ子供だった。でも、「空襲」「戦争」という言葉だけは、よく耳にしたし、よくおぼえていた。「今日も疎開、明日も疎開。」そして、自分たちの住む安全なところをもとめて、毎日見知らぬところをさまよひ歩く。田舎に知りあいのない者は、結局また市内におさまる。

私たちは白島に住んでいた。父が戦場へ行っているので、母と姉三人僕と、五人の命をただ一つの防空壕に托して、毎日毎日汗を流しながら壕を掘った。七月に入ると空襲はげしくなり、なかば頃には、もうきまっていたように、夜八時半になると、ラジオのけたたましい響きとともに空襲に入る。それぞれ荷物を手にして壕の中へとびこむ。誰も口をきかず、四人の子供の顔が母の方に集まる。いつもみんな無事でありますようにと、心の中で祈りつつ夜を明かす。朝になると、空襲解除とともに、皆壕からはい出る。今朝も変りなく皆の顔が食卓に集まる。今日一日無事でありますようにと、目と目を見あわせながら食事をする。突然ラジオで警戒警報が発令される。だが、すぐ解除になる。僕は何んの気なしに学校に行く。姉たちも、学校なり、動員されている工場なりへ行く。家には母と一番上の姉の二人だけが残る。

僕たちが運動場であそんでいると、頭上に飛行機が飛んでいるので、僕たちは口々に

「警報は解除になったのになあ。」

と言いながら、またあそんでいた。するとピカッと、青光りかなにかわからない光りが光ると同時に、僕は手で顔をおおった。何かなあと目をあけて見ると、真暗でなにも見えない。うろろうろ歩きまわるうちに、明るくなってきた。わが家へ帰ろうと思って、あたりをみまわすと、家らしい建物はもうどこにもなくなっていて、あちこちと火の手があがっている。

僕は母の名を泣き泣き呼びながら、家へど急いだ。僕の家がどこにあるのかわからなくて、うろろうしている。僕の名を呼ぶ姉の声がきこえる。姉を見たたん、僕はびっくりした。血でまっ赤に染って立っている。自分を見ると、両手両足の皮がみんなむけて、はしの方にはぶら下っている。なにがなんだかわからず、恐ろしいのと一しょで僕は泣きだしてしまった。母がいつのまにか瓦の間からはい出し、そこらのこうりから、オーバーとお父さんのとんびをひっぱり出した。それを、赤はだかの僕たちにさせると、

「長寿園に逃げるのよ。」

と母は恐ろしい声を出しながら歩き出した。僕も姉もひっ死で逃げて行く。ふりかえって見ると、すぐ近くに火の手があがっている。母の

「あわてなさんな。」「くぎをふみなさんな。」

という声が、後からきこえる。僕たちは川の土手へと急いだ。もうすこしで土手だというところまでくると、両側の家が燃えさかっている。その火の中を一二三と走って通りぬけ、やっとの思いで土手に出ることができた。もうこれでひと安心という気がおこったのか、僕はそこへばったりとたおれてしまった。母のきびしい声がきこえるので、又起きあがり、母について、どこというあてもなく、ただ安全なところを求めて、田舎の奥へ奥へと歩いていった。

そして六日の夜は、祇園の安神社にとまった。その夜は、火傷のため、だれもが「水」「水」と呼びあいながら、夜を明かした。七日の朝、僕たちはトラックで可部のお寺に運ばれた。姉はこの土地につくと、その夜死んでしまった。その時の母のかなしみを、どうして言いあらわしてよいか、お寺の生活をどうして筆にあらわしてよいか、僕はその時そこにいた人でないとわからないと思う。焼けただれた人たちが、毎日うなりながら日を送り、身よりのない人々には、うじ虫が体中にわき、何かわからないうわ言を言いながら死んでいく姿は、どうして言いあらわしたらよいのだろうか。それは、生きながらの「地獄」といったらよいのだろうか。この人々は、敗戦も知らず、戦争をにくみ、平和を愛しながら死んでいかれたことだろう。僕はまた姉との再会、父との再会のことを書きたいのだが、長くなるのでやめます。

最後に書きたい言いいたいと思うことは、

「戦争とはなにか。」

「平和とはなにか。」

「平和を守るには、なぜあの恐ろしい原子爆弾がいるのか。」

「人類と科学とが、なぜ同一に発達しないのか。」

僕の胸の中には、いつもこれだけの疑問がとけないで、ぶつぶすとくすぶとっている。